

Krylov 部分空間における Augmented GMRES 法について

黒岩 奈保† 野寺 隆†

1 はじめに

GMRES 法は、大規模な非対称行列を係数行列に持つ連立 1 次方程式

$$Ax = b \quad (1)$$

を解く反復解法の 1 つである。 $A \in \mathbb{R}^{n \times n}$, $\mathbf{x}, \mathbf{b} \in \mathbb{R}^n$ とする。ただし、通常、GMRES 法は、Krylov 部分空間から、残差ベクトルを最小にするように解 \mathbf{x} を構成する。Baglama ら [1] は、この Krylov 部分空間にある低次元空間 \mathcal{W} を付加することで、従来の GMRES 法よりも速く高精度な近似解に到達する算法を提案した。本発表では、GMRES 法のリスタート版を用い、その有効性について考察する。

2 GMRES 法

GMRES 法は、 j 反復目の解 \mathbf{x}_j 、初期残差 \mathbf{r}_0 に対し、最小二乗問題

$$\|A\mathbf{x}_j - \mathbf{b}\|_2 = \min_{\mathbf{x} \in \mathbf{x}_0 + \mathcal{K}_j(A, \mathbf{r}_0)} \|A\mathbf{x} - \mathbf{b}\|_2 \quad (2)$$

$$\mathcal{K}_j(A, \mathbf{r}_0) = \text{span}\{\mathbf{r}_0, A\mathbf{r}_0, \dots, A^{j-1}\mathbf{r}_0\} \quad (3)$$

を解くことで、残差ベクトルのノルムが最も小さくなるように解 \mathbf{x}_j を選ぶ。

2.1 RRGMRRES 法

Calvetti ら [2] による RRGMRRES (Range Restricted GMRES) 法は、通常の GMRES 法において用いる Krylov 部分空間 $\mathcal{K}_j(A, \mathbf{r}_0)$ を、 $\mathcal{K}_j(A, A\mathbf{r}_0)$ として行う。実際、GMRES 法における最小二乗問題、式 (2)、式 (3) を

$$\|A\mathbf{x}_j - \mathbf{b}\|_2 = \min_{\mathbf{x} \in \mathbf{x}_0 + \mathcal{K}_j(A, A\mathbf{r}_0)} \|A\mathbf{x} - \mathbf{b}\|_2 \quad (4)$$

$$\mathcal{K}_j(A, A\mathbf{r}_0) = A\mathcal{K}_j(A, \mathbf{r}_0) \quad (5)$$

というように置き換えることになる。

RRGMRES 法は、係数行列 A が非対称であり、右辺ベクトル \mathbf{b} に誤差が含まれる線形な悪条件問題に適用した場合、通常の GMRES 法よりも速く精度の良い近似解に到達する事が Calvetti ら [3] により示されている。

3 Augmented GMRES 法

GMRES 法は、反復解 \mathbf{x}_j の候補が含まれる空間として Krylov 部分空間 $\mathcal{K}_j(A, \mathbf{r}_0)$ を利用していた。そ

こへ新たにユーザーの定める空間 \mathcal{W} を付加したのが Augmented GMRES 法である。ここで定める空間 \mathcal{W} は、1 次関数や 2 次関数、階段関数といった低次元の空間である。実際には、最小二乗問題

$$\|A\mathbf{x}_j - \mathbf{b}\|_2 = \min_{\mathbf{x} \in \mathbf{x}_0 + \mathcal{K}_j(A, \mathbf{r}_0) \cup \mathcal{W}} \|A\mathbf{x} - \mathbf{b}\|_2 \quad (6)$$

を解くことになる。以下、具体的な解法の流れを簡単に示す。

3.1 空間の付加

GMRES 法は、丸め誤差の観点から Gram-Schmidt 法よりも良いとされる、修正 Gram-Schmidt 法を用いた Arnoldi 法により Krylov 部分空間の正規直交基底を生成する。結果として得られる Arnoldi 分解を用いて残差ノルムの表現を変形することで式 (2) と同等の最小二乗問題を導き、最終的な近似解を得ることになる。

この GMRES 法に空間の付加を組み込む為に、まずは skinnyQR 分解 [4]

$$AW = V_p R \quad (7)$$

を行う。 $W \in \mathbb{R}^{n \times p}$: 空間 \mathcal{W} の基底を各列に持つ行列、 $V_p \in \mathbb{R}^{n \times p}$: 正規直交行列、 $R \in \mathbb{R}^{p \times p}$: 上三角行列である。

次に、Arnoldi 法により決定される列を式 (7) の各行列に加えていき、 j 回の反復の後に Arnoldi 分解

$$A[WV_{p+1:p+j}] = V_{p+j+1}H \quad (8)$$

を得る。ただし、 $V_{p+1:p+j+1}$ は Krylov 部分空間 $\mathcal{K}_j(A, \mathbf{r}_0)$ の正規直交基底を各列に持つ正規直交行列、 H は上 Hessenberg 行列である。この時、Arnoldi 法の初期ベクトルとして $(I - V_p V_p^T)\mathbf{r}_0$ を用いることで、 V_p の各列に対する $V_{p+1:p+j+1}$ の各列の直交性が保たれ、 $V_{p+j+1} = [V_p V_{p+1:p+j+1}]$ は、正規直交行列となる。

3.2 最小二乗問題を導く

空間の付加が完了すれば、あとは GMRES 法とほぼ同様である。空間 $\mathbf{x}_0 + \mathcal{K}_j(A, \mathbf{r}_0) \cup \mathcal{W}$ における任意のベクトルは

$$\mathbf{x} = \mathbf{x}_0 + [WV_{p+1:p+j+1}]\mathbf{y} \quad (9)$$

† 慶應義塾大学理工学部数理科学科
〒 223-8522 横浜市港北区日吉 3-14-1

と表されることを踏まえ、式(8)を用いて残差ノルムを次のように変形する。

$$\begin{aligned}\|Ax - b\|_2 &= \|A(x_0 + [WV_{p+1:p+j+1}]y) - b\|_2 \\ &= \|r_0 + A[WV_{p+1:p+j+1}]y\|_2 \\ &= \|r_0 + V_{p+j+1}Hy\|_2 \\ &= \|V_{p+j+1}\|_2 \|V_{p+j+1}^T r_0 + Hy\|_2 \\ &= \|V_{p+j+1}^T r_0 + Hy\|_2\end{aligned}\quad (10)$$

よって、最小二乗問題

$$\min_{y \in \mathbb{R}^{p+j}} \|V_{p+j+1}^T r_0 + Hy\|_2 \quad (11)$$

の解を y_j とすると、式(6)の解は

$$x_j = x_0 + [WV_{p+1:p+j+1}]y_j \quad (12)$$

となる。

3.3 Augmented RRGMRRES 法

Augmented RRGMRRES 法は、Augmented GMRES 法における式(6)を

$$\|Ax_j - b\|_2 = \min_{x \in x_0 + \mathcal{X}_j(A, Ar_0) \cup \mathcal{W}} \|Ax - b\|_2 \quad (13)$$

とし、修正 Arnoldi 法を用いる際の初期ベクトルを $(I - V_p V_p^T)Ar_0$ として実行すれば良い。

3.4 Augmented GMRES 式(m) 法

GMRES 法を用いれば、理論的には高々 n 回の反復により真の解が求まる。しかし、計算量や記憶容量の観点から実用的であるとは言えず、Arnoldi 法により生成する正規直交ベクトルを $m (\ll n)$ に制限し、その時の近似解 x_m を次の反復の初期近似解 x_0 として用いる、リスタート版の GMRES(m) 法がよく用いられる。

本発表では、より良い近似精度を得ることを目的に、リスタート版の Augmented GMRES(m) 法を用いる。

4 数値例

空間の付加の有効性を確かめるために、C 言語を用いて算法のプログラムを作成し、数値実験を行った。また、使用した計算機は HP Compaq ProLiant DL145 である。以降、

$$W_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ \vdots \\ 1 \end{bmatrix}, W_2 = \begin{bmatrix} 11 \\ 12 \\ \vdots \\ 1n \end{bmatrix}, W_3 = \begin{bmatrix} 11 & 1 \\ 12 & 4 \\ \vdots & \vdots \\ 1n & n^2 \end{bmatrix}$$

$$\mathcal{W}_k = \text{range } W_k, \quad 1 \leq k \leq 3$$

とする。

4.1 良条件問題

まずは、 $\|A\|\|A^{-1}\| = 1.2 \times 10^1$ となる良条件の非対称行列について実験を行った。

- $A \in \mathbb{R}^{500 \times 500}$: 非対称 Toeplitz 行列。
1 列目 $[1, 1/2, \dots, 1/500]^T$
1 行目 $[1, 1/4, \dots, 1/500^2]$
- 解 x の j 番目の要素 : $x_j = \exp(-(j-1)/500)$

4.2 悪条件問題

右辺ベクトル b に誤差が含まれる線形な悪条件問題の例として、第 1 種 Fredholm 積分方程式を扱う。

Hansen [5] による Regularization Tools のテスト問題から、Matlab 関数 baart を用い

$$\int_0^\pi \exp(s \cos(t))x(t)dt = b(s), \quad 0 \leq s \leq \frac{\pi}{2} \quad (14)$$

$$b(s) = 2 \frac{\sinh(s)}{s}$$

を離散化したデータを用いた。 $A \in \mathbb{R}^{1000 \times 1000}$, 真の解は $x(t) = \sin(t)$, 右辺ベクトル b の相対誤差は 1×10^{-5} とする。

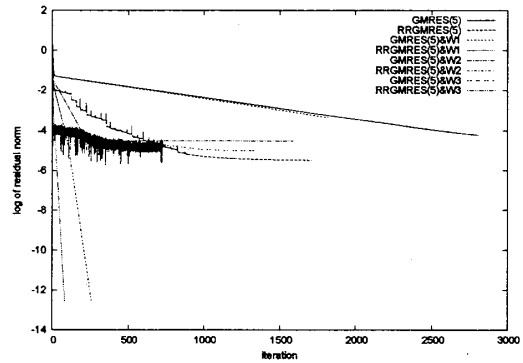


図 1: 悪条件問題 : 残差ノルム vs. 反復回数

参考文献

- [1] Baglama, J. and Reichel, L., "Augmented GMRES-type method," *Numerical Linear Algebra with Applications*, 2007; **14**: 337-350.
- [2] Calvetti, D., Lewis, B. and Reichel, L., "GMRES-type method for inconsistent systems," *Linear Algebra and its Applications* 2000; **316**: 157-169.
- [3] Calvetti, D., Lewis, B., and Reichel, L., "On the choice of subspace for iterative methods for linear discrete ill-posed problems," *International Journal of Applied Mathematics and Computer Science*, 2001; **11**: 1069-1092.
- [4] Golub, G. H. and Van Loan, C., "Matrix Computations 2nd edition," *Johns Hopkins University Press*, 1989.
- [5] Hansen, P. C., "Regularization tools: a Matlab package for analysis and solution of discrete ill-posed problems," *Numerical Algorithms*, 1994; **6**: 1-35.